
超ヒモ理論

yamazaki-natsumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超ヒモ理論

【Nコード】

N4828S

【作者名】

yamazaki-natsumi

【あらすじ】

大学を中退した男がヒモをめざす。

悦子の家に泊まる時、俺は、ソファか、床に寝ることにしている。悦子の家にはシングルベッドしかない。二人で朝までベッドの上で寝てみたこともあるが、すぐころがり落ちて、安眠できない。それで、俺はまずソファに寝てみるのだが、結局朝になってみれば、毛布にくるまって床に寝ているのだ。

悦子の家はワンルームマンション。俺の家は風呂無しアパート。ときどき風呂を貸してもらっていたが、今ではめんどくさくて、いつも一緒に住んでいる。同棲ってやつだな。

俺は留年した。四年になれなかった。親と相談した。

親は俺になんとか一年くらい余計に金は出しても良いと言った。しかし俺は大学にはなんの未練もなかった。教務課で退学届けをもらって、悦子の家に戻った。

「お金無いなら、アパート引き払って、私の所に住めば。なんなら学費くらい、私が立て替えようか。」

悦子は俺に、一年留年して、五年で大学を出る、その間、養ってやるというのだ。
ヒモ。

俺は悦子のヒモになるのか。

悦子は締めまり屋で、貯金も五百万円くらいもっていると、いつも言っていた。

そのほとんどは親からの小遣いだ。

一年あたり、いくらいくらまでは、相続税や贈与税がかからないからと、悦子は親から金を振り込んでもらっている。悦子は、地味で金のかからない性格なので、それを全部貯金する。そうしていると、自然と貯金が貯まるという仕組みだ。

俺は、もちろん貧乏人で貯金などない。あればあったで使ってしまう

う。女とか酒とかに。だから、貯金などありはしない。

悦子にしてみれば、俺をあと一年、面倒を見て、卒業させるくらいの金もっているのだろう。

俺は大学二年の頃、悦子を落とした。一年の頃は、悦子は、単に、みんなのアイドルというの過ぎず、俺には別段、深い気持ちを持つてはいなかったようだ。

しかし、二年になったある晩のこと、悦子は、急に自分から俺を求め、俺も悦子を求めた。

悦子は、酔っていてもいつも自転車に乗りたがる。女が夜道を歩くのは危険だからと、いつも自転車に乗るのだ。酔った勢いで、俺と自転車に二人乗りして、長い下り坂を下りると俺に命令した。しかし、俺は自転車がどんなに危険なものかを知っていたから、ゆっくりと坂の下まで降りて、それから自転車の足を立てて、悦子とキスをした。悦子はくすぐったが、俺を拒まなかった。

悦子は俺を家にあげた。

そして、その夜、俺たちは結ばれたのだ。

それ以来、一年以上の間、俺たちは半同棲の関係を続けている。

俺は、親に署名捺印してもらって、退学届けを教務課に提出した。俺は退学した。

アパートは解約し、荷物は実家に送り届けた。

そして、俺は、悦子の部屋に挨拶に寄った。

「田舎に帰るよ。」

「あと半年待って。」

「なぜ。」

「あなた、何か急ぐことでもあるの。」

「いや、別に。」

「じゃあ、私と一緒にあと、半年ここで暮らさない。私の心の整理がつくまでは。」

俺が田舎に帰るといふことは、悦子を捨てるというに等しいのだっ

た。俺が一方的に悦子との関係を解消しようというに他ならない。悦子は、それにささやかながら、抵抗するつもりじゃなかった。

俺は、別に何の予定があるわけでもなかった。この家の、居心地が悪くというわけでもなかった。悦子を嫌っているわけでもなかった。あと半年。居られるものなら居たいとも思った。俺はしかし、卑屈な気持ちになった。

「俺でも良いのか。」

悦子は何も言わなかった。言わない代わりに、いきなりキスをするふりをして、俺の下唇にかみついた。

「おまえはどうするのか。」

「私は普通に、大学を卒業して、就職するわよ。でも、あなたを食べさせていく気は、さらさらありませんけど。」

俺たちは、どこか、気晴らしに花見でもすることにした。

俺は去年の自分のブログを確認して、多摩境ではもう桜が咲いている頃だと思った。

俺たちが住んでいる八王子から、多摩境までは一時間もかからない。橋本で乗り換えて一駅。

俺たちは海苔巻きとかバッテリーを駅ビルの中の店で、緑茶のペットボトルと一緒に買ってでかけた。

突風が吹いている。俺たちは京王線多摩境で降りる。

駅前がすぐに山になっている駅というのは、首都圏では珍しいよ。

俺は、山の景色を遠望して思った。しまった。まだ桜は咲いていないようだ、と。

多摩境の山は、ヤマザクラの名所である。

ヤマザクラというと奈良の吉野だが、関東でいうと多摩境。ここは戦車道路という緑道が通っていて、そこに関東随一のヤマザクラの並木があるのだが、今年はまだほとんど、咲いていないのだった。

悦子はどんくさい女で、坂を上るとすぐに息があがってしまう。俺たちは展望台で、バッテリーと海苔巻きを食い始めたのだが、あまり

にも風が強すぎて、目に砂ぼこりが入るし、体温はどんどん奪われるので、とにかく風の少ないところに、場所を変えることにした。戦車道路と言うのは、旧日本陸軍がここで戦車の試乗をしたからだというが、そういう名の、ゆったり広めの尾根緑道をたどって、パークセンターというところへ行ってみるが、これも閑散として土ぼこりが舞っている。風が強いので、悦子が公園管理事務所のようなところへ入って休みたいというのだが、節電のせいかわからないが、中はがらんとして暗い。職員は中にいるようだが、声をかけるのがためらわれる。去年はフリーマーケットなど催されてにぎやかだったのだが、今年はさくらまつりが中止されたのと、平日に来たせいで、あとはやはりまだ桜が咲いてないせいで、ひとけがまるでない。それで俺たちは早々に退散して、まだ日も高いので、八王子に戻って松竹水産という店に入った。

悦子は俺が外出するとあまりに松竹水産ばかり行きたがるので飽きてしまったようだ。しかしここは昼からやってるし安いので俺は好きなのだ。今日は、貝の盛り合わせなどを注文する。

悦子は、回転寿司に行っても貝が好きで、またスーパーでも貝の刺身を買ってくるくらいだから、貝を食わせると喜ぶだろうと思った。サザエとはまぐりとホツキ貝が一つずつまるごと出てきてそれをテーブルのガスコンロで焼く。

はまぐりが焼けて殻が開いたひょうしに中の汁がこぼれて、身が上側の殻に張り付いたままになってしまった。これでは汁がほとんど残らない。一方ホツキ貝は最初から二つに切って開いてあったから、うまくこぼさず焼けた。俺はその片側だけを食べてあとはみな悦子に食べさせた。

「いい。」

「おまえ、貝が好きだろ。遠慮せず食べよ。」

俺は、家に帰る前にちよつと酒が飲みたかっただけだ。海苔巻きもバターも食ったし。つまみを少しつまめればそれで良かったのだ。「しかし、はまぐりを、汁がこぼれぬよう焼くのは難しいものだな。」

「はまぐりを焼くと汁がこぼれるのは仕方ないのよ。身は必ず上にくつつくものなのよ。熱さから逃げるためにね。」

と悦子が言うので俺は感心した。そんなことは初めて知った。

「今日は楽しかったね。」

と悦子が言い始めたので俺はほっとした。花見は失敗だったが、貝を食って悦子の機嫌が直ったらしかった。

「しかし、花がまだ咲いてなくて残念だったな。」

「そんなことないわ。いろんな種類の桜がみれてよかったわ。」

確かに尾根緑道には、何種類もの、名前もよくわからん桜がいろいろ咲いていた。

後で家に帰って聞いたのだが、悦子はサザエの肝が苦すぎたので食わずに残したのだそうだ。

「俺がせっかく、おまえが貝が好きだからと大好きなサザエもおまえに食わせてやったのに、肝を残すとは何事だ。」

「だってあんまり苦いんだもの。」

「もつたいない。だったら肝だけ俺にくれりゃよかったのに。」

「そんなこと、言われなきゃわかんないわよ。」

「おまえは肝が好きだと思ったよ。いつもレバ刺し食べるじゃないか。うなぎの肝串だって肝吸いだって好きだろう。」

「だってサザエの肝は苦すぎるんだもの。」

まあ実は俺も貝は好物でほんとうは食べたかったのだ。

ある朝起きてみると、俺はびっくりした。朝食が、ずいぶんと立派だったからだ。

俺が10時過ぎに起きて見ると、悦子は俺に「おはようございませう。」と言った。

俺も「おはようございませう。」と言った。

深夜、ずいぶん余震が揺れた。俺は、起きようか起きるまいか迷いながら、地震が収まったので、そのまま寝て、夜が明けても、別に

することもなかったから、そのままだったらと寝続けた。そして起きたら、悦子が、朝ご飯の用意をして、俺を待っていた、というわけだ。

悦子は、夜風呂に入り、俺は追い炊きして朝風呂に入る習慣である。悦子の長い髪の毛がいっぱい湯に浮いている。

俺はまず風呂に入り、それから着替えて、やおら飯を食うことにした。

あじの開き。卵。納豆。

卵と納豆は最近なかなか手に入らないのだが、悦子があちこちスーパーを回って、買ってきたものらしかった。

「ありがとうさぎ。」

俺は、悦子にお礼を言った。

無くなって見て、初めてわかる、納豆のありがたさ。せいぜい100円も出せば、3パック買えた納豆が、今ではなかなか手に入らない。卵もそうだ。

俺は、怠け者で、単位が足りなくて留年したわけだから、どうあっても、四年で卒業は無理である。その後、就職できるあてもない。

「悦子。おまえ、俺に復学して、大学を卒業して、普通に就職して、そしておまえと結婚して、子供を産んで、家を買って、死ぬまで幸せに暮らしたい、そんなことを考えているのか。」

俺の質問は、ずいぶん意地の悪いものだったに違いない。

悦子は器用に卵かけご飯を食べていた。

無言だった。

悦子は慌ただしくテレビのチャンネルを変える。もう、地震のニュースもずいぶん減って、いろいろ雑多な番組が混じるようになってきた。

俺たちは、なんでよりによってこんな時代に生まれてきたんだろう、そう俺は思った。

俺はしかし、これといって何のとりえもない男だった。

悦子を幸せにしてやることすらできない。

第一、俺はまだ成人したばかりだというのに、なぜ女子供を養わなきゃいけないのか、などと思うのだ。なぜ悦子とこれから死ぬまで一緒にいなきゃあならないのか。そんな義務は俺にはない。

「のどに骨がささった。」

悦子は苦しそうにそう言った。

「大丈夫。骨はカルシウムだから、そのうち解けるよ。ご飯をまるごと飲み込んでみな。」

俺もしょっちゅうのどに骨がささるんで、そんなことはどうということもない。

食事を終えて、俺はせめてもの罪滅ぼしのつもりで、皿を洗った。

それから、「ちょっと散歩してくる。」と言い残して、ポケットに小銭しかないので、外にでかけることにした。悦子は大学へ行く。

俺は、四月だというのに、学生でもなく、無職で、ふらふらと八王子の駅前に出た。

八王子という町は、よく考えると変な町である。南口にはほとんど何も無い。北口はけっこう栄えている。道も広々してて、区画も良く整理されていて、近くに大学がたくさんあって、ビジネス街のようにも、学生街のようにも見える。

しかし、駅前のロータリーから眺めると、いきなりソープランドの看板が見えたりする。町中に入っていくと、やはり、普通の蕎麦屋や居酒屋の地下がいきなりソープだったりする。こんなに、普通の繁華街の中に、風俗の店が混在している町というのは、そんなに多くはないだろう。

俺はそんな北口には背を向けて、南口に出て、南浅川沿いにだらだらと高尾の方へ川をさかのぼり始めた。このまま高尾山にでも登ってやろうか。当てはなく、時間はいくらでもある。

ひろびろとして気持ちの良い遊歩道。ソメイヨシノも良い感じに満開だ。

ふと見ると、俺の目の前で、桜の花をひたすら携帯のカメラで撮影

している女にどうにも見覚えがある。俺が声をかけたものかどうか迷っていると、向こうも気付いて話しかけてきた。

「あら、こんにちは。」

「そうだ、思い出した。タイ料理屋の店員だ。」

「お花見ですか。」

「そうよ。ねえ、ほら、こんなに満開で。」

「そういつてその女は、ええつと名前はなんと言ったか覚えてないが、わざわざ撮った写真を俺に見せようとする。」

「そんなに撮って、どうするんですか。」

「お店のスタッフたちや客に見せようかと。あと、田舎の親に送ろうと思つて。」

「へえ。そうなんだ。」

「うちの田舎つて、千葉のほうなんだけど、今も余震がすごくて、停電したりとか、近所でも地面が液状化したりとか、まだ大変みたいよ。」

「へえ。」

「そういや、あなた、大学生じゃなかったの。新学期は。」

「いや、俺はもう四年なんで、そんなしょっちゅう授業があるわけじゃないんだ。」

「ふーん。そうなんだ。」

俺はなぜかつい嘘をついてしまった。しかし、大学を辞めたなんて個人的なことを、わざわざ彼女に話す必要もない。

「それで、今日は一人で散歩？」

「うん、高尾山に登ろうかと思つて。」

「ええつ。高尾山。ここからずっと徒歩で？」

「そうだよ。」

俺の予測では、高尾までがだいたい一時間。そこから山登りして、まあ、二時間。夕方まで、たっぷり時間つぶしができる。春の高尾山。山歩きも、まんざら悪くはないはずだ。帰りは電車にでも乗れば良い。

「ずいぶん、暇人なのねえ。就活はしてるの？」
「なんだか、やけに俺のことを詮索してくるやつだ。世間話のつもりなのか、それとももともと俺に興味があるのだろうか、そう思って目玉のぱちくりとしたその女の顔をながめてみたが、考えるのがめんどくさくなったので、適当にごまかすことにした。」
「もちろん、やってるさ。面接まで残ったこともあったけど、結局落とされたよ。」
「へーえ。たいへんなんだねえ。」
「大変と言えば大変ではある。」

「ねえ、あなた、こないだ店に連れてきてた彼女と、まだつきあってるの。」
「いかにも出し抜けに彼女は聞いた。悦子と一緒にタイ料理屋に行つたときのことを言ってるらしい。」

「うん。一緒に住んでるんだ。でもあと半年くらいで別れることになるかもしれないな。」

「あら、どうして。嫌われたの。嫌いになったの。」

「いやあ。俺の、一方的な、個人的な理由なんだけど。」

「じゃあそのうちフリーになるってこと。」

「いや、まだ別れると決まったわけじゃないが。」

「ふうん。そうなの。まあ、いいわ。ねえ、あなた、私なんかどうかしら。」

「えっ。」

「私を女としてどう思う。」

「いやあ、どうっていうか。」

「私、別にあなたに彼女が居てもかまわないわ。二号さんでもいいよ。どっ。」

「本気で言ってるのかい。」

「・・・うん。」

俺は、生まれて二十年くらいしか経ってないせいだと思うが、女性

心理というものがまだまださっぱりわからない。だが、こういうふうな形で女にいきなりコクられたことは、これが初めてではない。悦子と付き合い始めて一年あまり、その間に、何人かにこんなことを言われたことがある。そのたびに俺は軽いショックを受ける。なぜ俺なのか、と。

女というものは、なかなか自分から告白できないので、それでバレンタインデーなどというものがあると、言われているのだが、それはたぶん嘘だ。女というのは案外しらっとこういうタイミングに告白するものだ。そういう意味では男の方が話の切り出し方は下手なんじゃないだろうか。

俺は言う、「女は金がかかる。一人でもたいへんなのに、二人も一度に付き合えない。」すると、こんな具合に答える。「私、全然お金のかからない女なの。」

俺は必死で考える。ははあ、彼女は本気で俺に惚れているらしい。金は要らない。彼女が居てもよい。今、彼女は、ワンルームマンションで一人暮らしで、寂しくて死にそうだから、ときどき家に遊びに来てほしい。

女の一人暮らしというものは、俺たち男が考える以上に、さうとう寂しいものらしい。思うに、犬や猫などのペットを飼うような気分なのかもしれない。ペットショップで生き物を買ってきて寂しさを紛らわすよりも、人間の男と付き合った方が、そりゃあずいぶん健全だろうと思う。そうやって彼女が救われるのであれば、彼女を俺の二号さんにしてやっても良いのではないかと、心がぐらぐら揺れ動くこともある。

俺は、自分以外の男たちが、女からどんな形でコクられているのか、まるで知らない。ただ俺に関して言えば、そんなふうに言われることが多いというだけだ。

それで、俺は、まださういう女たちの誘惑に負けて、二股をかけたということはないのだけど、金も要らぬ、寂しいから二号になりたいたいなどといった彼女らのしおらしい口説き文句を信用して、つきあ

い始めると、女というのはだんだんに独占欲というものが出てきて、そのうちだんだん女房気取りとなつて、世間にもああいつは二股かけてるんだなということが知れ渡り、そして修羅場に発展するのではなからうか。世の中には、彼女のいる男を寝取るのが好きな女というのもあるのに違いない。女というものはそもそもつきあい始めるときの約束などより、その場その場の感情を優先するのではなからうか、そう俺はいつも、びくびくおびえているのだ。

それに「私、子供がほしいから、タネだけちょうだい」みたいなことを言うやつがいて、ほんとにそんなことを言うやつがいるんだとびつくりした。子供なんかできた日には養育費がいくらかかるかしない。「金は要らない、自分で育てる」などと言つてはいるが、それで済むはずがない。本人は一人で育てる気でも、周りの親戚などが、やれ認知しろとか、籍を入れるとか、定職に就けとか、うるさく言つてくるに違いないのだ。

もし何人かとつきあつていたとして、その中の一人に俺の子供ができてしまえば、俺はきつとその母親と結婚せざるを得なくなるだろう。世間というものは、そうしたものだ。そこまで計算してその女が言っているのか、或いは女というものは、まったく計算無しにそんなことが言えるのか。女は怖い。

俺はしかし、今の自分のみじめな境遇を思い返し、俺のようなやつでも慕つてくれるやつとは、なんらかの關係を持つておいた方が良いのではないか、と考えた。それは、ヒモの発想というのかもしれない。俺自身、自分がヒモの適性があるのかどうかまったくわからん。そんな大それたことは考えない方がよいのかもしれないが、ともかく俺を養つてくれそうな可能性のある女には優しくしておこうと思つた。

俺は彼女とメアドを交換し、南浅川の桜並木を背景にツーショット写真を撮つた。彼女の名は秋子^{あきこ}というのだった。古風な名前である。秋子は言つた、「あなた、^の裏君^のつて言うんだ。かわいらしい名前だね。」

秋子は夕方から仕込みが始まるというので、俺は彼女とそこで別れることにしたのだが、彼女に一つ言い忘れたのを思い出した。

「そうそう。俺、さつき、君に嘘ついたんだ。俺、今月で大学辞めたんだ。退学したんだよ。」

「へえ、そうだったんだ。まあでも、大学なんてどうでもいいじゃん。長い人生、これからせいぜいがんばらなよ。」

「ああ。」

春の昏下がり、俺は、再び高尾のほうへ、だらだらと散歩を続けた。

平日の昼間、登山客もまばらな高尾山を、ケーブルカーもロープウェイも使わず、ただならに登りながら、俺はどうして「ヒモ」になってもなろうか、などと自分が考え始めたかを、自分なりに整理してみることにした。

俺は今二十一だが、俺くらいの年で、ちょっと女にもてるやつは、誰もが一度くらいは、ヒモになってみようか、くらいのことは考えるのに違いない。俺の場合には、その直接のきっかけは留年と退学だった。正直な話、俺は今まで自分がヒモになるなんてことは、考えてもみなかった。

留年というものはいきなりくるのではない。徐々に単位が不足していき、進級要件を満たさなくて、結果的に留年するのだ。だから、留年というのは、受験に失敗するというのとは、だいぶ話が違う。かなり、ずっと前から、その予兆はあったわけである。

で、留年の直接の原因は、俺の場合、卒業して就職するのが嫌になったからだろう。

俺は、小学生の頃から、地方公務員になりたいと、ばくぜんと思っていた。

俺の父は大学出のサラリーマン、母も短大卒のOL、職場結婚して母は寿退社。今に至る。別に勉強が良くできたわけでもなければ、特に良い大学を出たのでもなければ、一流企業勤めでもない。ごく平凡な家庭だ。しかし、彼らが就職して結婚した頃は、日本の景気

は良かった。誰もがベルトコンベヤーに運ばれるように、受験勉強して、大学を出て、就職して、終身雇用。これを社会主義国家と言わずしてなんと言おうか。

俺は自分の父母を観察して、俺もまたあのような家庭を再生産するのだろう、それ以上の幸せを望むのは無駄だ、そう考えるようになり、とにかく安定していて、そこそこ楽で、あまり責任をとらされないような仕事に就きたいと思った。対人関係の仕事はしたくない。それで、地方都市の県庁の役人で、かつ技術系の仕事にしようと考えて、理系に進学した。

しかし世の中はますます不景気になっていき、公務員、特に地方公務員になろうと言うやつは、税金泥棒か何かのように、目の敵にされるようになり、しかもそれでもなお、地方公務員になろうというやつがどんどん増えていく。公務員の求人倍率ばぐんぐんあがり、さらには、臨時職員や契約職員、民間委託などが増えるものだから、正規の公務員の枠は減るばかりだ。公務員になろうという俺の志望はほとんど実現不可能となった。

今更、民間のどこかの会社に就職する気もなし。とりあえず、何年かサラリーマンとやらを経験してみようかと、いやいや就活してみても、まるでかすりもしない。何もかもうんざりしていたところ、うっかり必要な単位を落としてしまった。今時就職浪人という言葉があるけれども、一留したからと言って就職状況が好転するわけもない。このまま大学に居続けても金の無駄だ、むしろ、この機会に早めに中退した方がましだ、と思ったとしても、何もおかしくあるまい。

ともかく、今の世の中、このままサラリーマンになったからと言って、安泰に暮らしていけるといって何の保証もないのだ。

もし、俺が、ヒモの才能があるんなら、今のうちその道に進んだ方がましじゃあなかるうか。そう考えてもおかしくないではないか。やはり、俺は、自分の判断がそう大きく間違っていないのではないかと思わざるを得なかった。

俺は苦も無く高尾山の頂上までたどりつき、平日のがらがらにすいている茶屋で、山菜そばとビールを注文して、たった一人で酒盛りを始めた。

日本の人口はこれからどんどん減っていく。どう考えても、日本の経済はこれから悪くなり、デフレになって、普通にサラリーマンなどやっついては賃金が下がる一方で、貧乏になるに決まってる。就職して賃金労働者になろうというのは、ある意味で、自殺行為に近いものがある。ただまあ、団塊の世代が大量に退職し、労働人口が日本人の総人口に占める割合がぐっと減ってしまうから、雇用状況は回復するかもしれないが、しかし、正社員とか、定期昇給などというシステムはもう二度と戻ってこないだろう。みながおよそその能力にに応じて雇われるように変わっていくはずだ。

俺は、何か大義名分のあるヒモにはなりたくない。芸術家とか、作家志望とか、ミュージシャンとか、芸人とか、あるいはホストとか。そういう、女を食い物にして、いつか一発当てたら良い思いをさせてやるとか、そんな嫌らしいヒモにはなりたくない。俺はできることなら、女社長の専業主夫のような身分になりたい。探せば案外そんな女は居ると思うのだ。逆玉というのかな。ずっと同じ女のところに行く必要もないだろう。適当に女のところを渡り歩いて生きて行く。俺にはきつとそんな生き方が似合っているに違いない。

そうして考えてみるに、悦子は、けっして俺を養えるような女ではない。早く別れてやらないと、あいつがかわいそうだ。あいつはもっと、経済力のある男の妻になるべき女だろう。

さっきの秋子という女だが、ああいうやつのほうが、お互いあまり深入りせずに、気楽につきあえるのではなからうか。まだつきあってもみないでなんともわからんが。

しかし、これから、梅雨が始まるまでは、気候もよくて、夜外で寝ても風邪は引かないし蚊も出ない。住所不定の身には過ごしやすい季節だ。悦子のところには二、三日に一度くらい帰ることにして、

しばらくはあちこち野宿でもしてみようかな。浮浪者狩りにあわないようにしないとな。

一週間ほど何もしないでいると、人間というのは、逆に何か働きたくなるものらしい。俺は秋子に電話して、彼女の店で皿洗いでもなんでもして働けないかと聞いてみた。彼女はあっさりOKした。

俺が久しぶりに悦子の家に戻ると、悦子はどこかにでかけたのが不在だった。合い鍵で入ると、俺はまずシャワーを浴び、着替えた。洗濯物がたまっていたので、悦子の服といっしょに勝手に洗濯した。夜中の九時過ぎに悦子は帰ってきた。友達と食事をしてきたらしい。

「悦子。俺さ、この家にお金入れた方が良くいよね。」

「えっ。何それ。変な気を遣わないでよ。」

「いやあ。俺さ、自分のアパートがあつた頃は、この家に遊びに来ている感覚だったんだけど、もう俺のアパートも無い、いわば住所不定の身じゃん。ていうか、同居しているわけだよな。住まわせてもらっているんだよ。だから、俺の気持ちとしては、生活費を入れたいんだ。そんなたくさんは、払えないと思うけど。」

「あなた、お金どうするのよ。もしかして、バイトか何かするつもり。」

「そうだよ。タイ料理屋で働こうかと思ってるんだ。」

「馬鹿なこと言わないで。そんなアルバイトなんかするくらいなら、就活するか、専門学校にでも行って資格でもとるかしたら。お金の心配はしなくて良いって言ったでしょ。」

驚いたことに、悦子は、俺を何かまともな仕事に就かせたいと考えているらしい。俺はもう、近々悦子とは別れる気でいた。それまでただ食い物と住む場所をたかるだけの男で居たくないから、生活費を入れたい、そう思っていたのだが、しかし、悦子はまだ俺が人生をやり直して、これからもずっと一緒に暮らしていくつもりでいるらしかつた。

俺は悦子が不憫でならなかつた。

しかし、俺がいつしよに居れば必ず悦子は不幸になるだろう。なぜって、俺はもう、これからヒモとして生きて行くことに決めたのだから。悦子は、俺がたかるべき相手ではない。そんなことをしたらお互い不幸になってしまう。

俺はとりあえず、この場をごまかすことにした。

「悦子。俺はしばらくバイトをしながら、自分の気持ちを整理したいだけなんだ。ずっとフリーターみたいな暮らしをしようというのじゃないよ。そのうち必ず就職するつもりだから、しばらくバイトをやらせてくれないか。その給料の中から、君に少しでもお金を渡したいんだよ。」

悦子は俺の腹をグーで殴った。

*

俺がただのタイ料理屋の店員だと思っていた秋子は、実は店長だったことが判明した。その上、俺より七歳も年上の二十八だった。童顔なので、俺と同じ年くらいだとばかり思っていた。店のオーナーはタイ料理屋の他に沖縄料理屋とかインド料理屋などのエスニック系の似たような店をいくつも経営している。とても怖い中年のおじさんで、どうも俺を嫌っているらしい。オーナーが来ると秋子も俺もぺこぺこしなくちゃならない。

だが、秋子は俺にはいつもやさしい。秋子は、これまで使っていた男の店員がどうにも我慢できなかつたらしく、俺が来ると入れ替わりで、同じオーナーの他の店に出してしまった。あとは、女のバイトが、忙しいときに他の店からヘルプに回ってくるくらいだ。客がほとんど居ないときとか、他の店が忙しくなると、秋子は俺に店を任せてどこかへ行ってしまう。そんなとき俺は、自分で調理などできないものだから、作り置きのみみを出したり、カクテルもどきを作ったりする。この店は、男が一人で来るといふことは、あまりない。もし居たとしてもそれは秋子さん目当てであって、俺

しか店の中に居ないとわかると、そういうときは店の中に入ってこようとはしない。だいたいはふらっと迷い込んでくる男女のカップルか、あるいは、女どうしの客である。秋子は、

「あなたは、料理はへただし、ぐずだから、その分愛嬌でお客様たちを楽しませて、飽きさせないようにしなきゃだめよ。」
などと言う。

「俺ってそんなに女性客に人気が出ますかね。」

「馬鹿ねえ、何うぬぼれてるのよ。せいぜいあいそう良くして、お客様に気に入られるようにしなさい。それから、あなた目当ての客がつくようになって、お客様に手を出したらだめよ。特定の客と関係を持ったときは、私もあなたを店においておけなくなるから。わかったわね。」

俺は別に秋子とあれ以来深い仲になることもなく、ただ淡々と仕事仲間として接していた。秋子はあのととき、確かに俺に、二号になっても良いなどと言っていたはずなのに。女心は秋の空とはこのことか。そういえば彼女の名前も秋子だしなあ。なんてくだらんことを考えながら、俺はけっこうまじめに働いていた。給料はおそろしく安い、俺はまだ半人前なのだから、もらえるだけでもありがたい。そして、夜の十一時まで仕事して、その後かたしを済ませるとつくに十二時となり、早寝早起きな悦子の寝ている家に、俺はこっそり帰ってきて、お休みのキスをする。悦子はいつももぞもぞとする。そして俺が朝遅く起きてみると、悦子はたいてい大学かどこかに出かけた後なのであった。

いつものように俺が朝の十時ぐらいに起きると、悦子はもうでかけていなかった。

このくらいの陽気になると、俺は風呂に入ると暑苦しくていけないが、悦子は良く熱い湯に浸かって身体を温めないとすぐに風邪を引いてしまうらしい。俺は、朝起きてから風呂に入る主義なので、いつものようにまず悦子が昨晚入ったぬるい湯に、追い炊きもせずに

入る。そうしてのんびりと三十分ほど長湯をして、着替えて、残り湯で悦子の服と俺のを一緒に洗濯して、ベランダに適当に干す。そのあと湯を落として風呂釜を洗濯。このようなことはだいたい俺の仕事だ。

それから朝飯だか昼飯だかわからん飯を適当に食う。炊いた米が炊飯器の中に残ってたり、冷蔵庫の中に入れてたりするから、それと冷蔵庫の中のご飯の友みたいなやつと一緒に食べれば終わりだ。炊いたご飯が切れた場合は俺がさらに炊いておく。

ヤカンでお湯を沸かす時間で俺は皿を洗う。悦子は冷え性なので、洗い物が苦手であるから、だいたい俺が洗ってやることが多い。特に、悦子は魚の焼き網を洗うのが下手くそだ。普通の洗剤とクリーマクレンザー、それから金網には粉のクレンザー。スポンジにスチールウール。そういうものの場合によって使い分けて洗うということが、悦子にはなぜかできないらしい。だから、俺が洗ってやるのだ。そうしていると湯が沸くから、コーヒーを落として飲む。

俺のいけない癖だが、朝風呂に入り腹が一杯になるとどうしても眠くなる。タイ料理屋の仕事はどうせ午後からなので、俺はあと一、二時間寝ることにする。いつもは床で寝るところであるが、悦子が外出しているときは、悦子のベッドで寝る。女の寝たあとのベッドで寝るといのは、なかなか悪くない。

悦子は就活に必要だからと、あとチラシを読むからと新聞を取っているのだが、悦子が自分で新聞を読んでいるのを見たことがない。だから俺が代わりに新聞を読んでやると、悦子はあとでチラシだけ目を通すのだ。

俺は遅番で、だいたい夜の十一時か遅いときは午前二時くらいまで働くことになる。それで昼の三時くらいに店に出ると、ランチの終わった頃合いであり、ヘルプは帰った後で、秋子一人が割合と暇そうにしている。俺はまずランチでたまった皿を洗う係となる。暇とは言っても、秋子といるいろだべっている暇があるわけではなく、客が来たらオーダー聞いて料理を出して片付けてお会計などしなく

てはならず、そのうち五時ともなるとこんどは飯を食ったり酒を飲んだりする客で店は混み合ってくる。金・土・日などはほんとうに忙しいから、この時間帯からもう一人バイトが入る。秋子は、俺が来るようになってからはずっと早番に回ってるから、一度どこかに休憩に出る。

今日は平日で客の入りもあまり良くなかった。夜十時くらいに俺がぼーっとしていると、秋子が来て「今日はもう終わりにしていいよ」というので、洗い物も全部済ましてあったから、そのままシャッターを下ろして閉店にする。

表の戸を閉めたらあとは裏の勝手口しかないが、ここから知らぬやつが入ってくることはない。俺は久しぶりに秋子と二人きりになったから、声をかけてみる。

「俺の二号さんになる話、覚えてるか。こないだ、南浅川でそんな話をしたよなあ。」

秋子は苦笑する。

「馬鹿ねえ。覚えてるわよ。でも、あなた私の店の店員になっちゃったでしょう。」

私はこれでも、この店の店長で、お店を任されていて、この仕事でご飯を食べていかなきゃならないの。他の店員やオーナーの手前、あなたといちゃいちゃべたべたするわけにはいかないのよ。そのくらいわかるでしょ。」

「もしかして、オーナーが俺に焼きもちを焼いているのか。」

「さあねえ（笑）。」

ま、ともかく、二、三ヶ月は、他のスタッフに悟られないように、他人のふりをしてましようよ。」

そついつて秋子が俺の手を取るから、俺は秋子を抱きしめようとしたが、秋子はやっぱり俺を押し返した。秋子はどうやら、今のところ、俺と毎日店で顔を合わせているだけで満足なのらしい。

俺と秋子は、しょっちゅう、店の中をすれ違うときに、体をぶつけることがある。ただ店が狭苦しいせい、それとも秋子が俺に体を

ぶつきたいせいなのか、俺にはよくわからないが、いくらなんでもあんなにたびたびぶつかる必要はないんじゃないかと、俺には思えるのだ。

夏休みに入る前、なんと、悦子の内定が決まった。聞いたこともないような、神田に本社がある、小さな商事会社だ。

「おめでとうさぎ。」

俺は一応、悦子を祝ってやった。

八王子から神田まで、JR中央線の特快で一時間ほどで通えないわけではないが、いかにも遠い。通勤はどうするつもりかと聞いてみると、

「あなた次第だけど、実家の茨城から、つくばエクスプレスで通おうと思うの。」

おお。悦子がいきなり核心を突いてきた。もし俺が、このままぶらぶらして、ヒモ状態を続けるか、或いは別れてしまえば、悦子は実家へ帰る。悦子が俺に半年の猶予をくれたのは、もともとそういうつもりだったからだろう。四年も後期ともなると、週に一度ゼミに顔を出す程度だから、悦子にしてみれば、八王子の下宿などさつさと引き払い、実家から通うというのもありだろう。

しかし、悦子は未だに俺に未練があるようすだった。もし、俺が、悦子とずっと一緒にいたいと言えば、どうなるのだろうか。

例によって俺は毎日おもしろおかしくタイ料理屋で働いていた。俺は建築学科に居たから、配管などもいろいろ見てやって、修繕などしてやると、秋子は喜んでくれる。なにしろ水商売というやつは水回りのトラブルが多いわけで、オーナーはそういう店舗をいくつも持っているから、俺がそれをただで修理してやると、大いに喜んで俺の待遇も、最初の頃に比べるとずいぶん良くなった。俺を目当てに通ってくる客がいるのかどうだか知らないが、俺は年上のおばちゃんたちにはずいぶんかわいがられる。

その他、悦子の友達も興味半分なのか、或いは偵察に来るのか知らないが、たまにくる。悦子自身が来ることはない。今日も悦子の友達が二人連れで、カウンターごしに俺に話しかけて、「ねえ、襄くん、あなた、今なら復学届を出して、前期は休学扱いにして、その半期分の在籍料と、後期の授業料を払い込むだけで、復学できるのよ。後期から復学したら。そうしたら、一年か一年半遅れで、卒業できるわよ。」などと、ややこしいことを提案してくる。なるほど、後期から復学して、進級要件を満たすだけ単位を取って四年にあり、四年の間で卒業研究をやりながら、三年次に取りこぼした必修の通年科目などを再履修すれば、うまく行けば来年度、単位が足りなければさらに半期延長して再来年の夏に、大学を卒業することは可能だろう。

なんというおせっかいなやつだろう。俺のためにわざわざ教務課で調べてきてくれたのだろうか。しかし、今更退学を取り消しにするつても、どうだろうか。

あつという間に秋となって俺はいつの間にかこのタイ料理屋で半年近くも働いたわけである。オーナーも秋子も、俺にこの店を任せたい、つまりここの店長になつてもらいたがつているようだが、それはどうだろう。俺の得意はいまだに皿洗いと配管工事くらいで、調理や給仕などは、そんなに適性があるとも思えない。俺はもちろん調理師免許などもたないただのバイト。ていうか、そんな免許などとうもものならまずまずこの仕事を辞めにくくなるではないか。

この店は本格的なレストランというよりも、エスニックな気分を楽しむためのなんちゃってバーみたいなもので、雰囲気盛り上げればそれでよくって、俺みたいな素人っぽい店員でもかまわないという。仕込みなどは本職の料理人がやってくれるから、そういう作り置きのカレーやトムヤムクンなどを俺は暖めて出しているだけともいえる。

秋子は秋子でいそがしく、オーナーはいけいけどんどもっと店

をたくさん出したいらしく、今度は町田にも店を出そうなどといっている。秋子は町田の新店の店長になるかもしれない。そもそも俺は秋子を二号さんにするためにこの店で働き始めたはずだったが、いつのまにかそんなことはうやむやになってしまった。おかしい話だ。

それとは別に、最近俺を目当てでちよくちよく来ている、三十過ぎのおばさんがいる。バツイチのお母さんだ。康子という名だ。田舎から母を連れ出して、子供のもりをさせて、自分はOLをやっているのだという。何しろ忙しいから、こうして飲み屋に来るのは彼女にしてみると、ほんとにたまの息抜きなのだろう。

康子が、気易く、俺に身の上話を語って聞かせるには、彼女は九州の方の寺の娘であって、

「兄さんも、東京に出て会社員やって、母も私と子供のために上京してて、父は母と別居するのは不便で困る、早く隠居したい、などと言っていて、兄に住職を継がせたいんだけど、兄は継ぎたくない、田舎には帰らないって言うてるの。兄が継がないと、兄弟はあと妹の私一人きりだから、親戚の誰かが継ぐことになるんだけど。」などという。俺は、そういう客の身の上話を聞くのも仕事のうちなのだろうと思うから、うんうんと相づちを打ちながら聞いてやる。俺も気易く、康子に、

「俺は、大学中退してしまって、どこかの会社の女社長のヒモにもなつて、のんびり暮らそうかって思っているんだ。」

などと打ち明けたところ、康子の目がきらーんと光り、

「女社長ねえ。私に当てはあるわよ。今度、襄くんに会わせてあげましようか。」

などという。

「紹介料なんて取らないわよ。ただ、私たちと一緒に、外で飲んでくれれば良いだけ。」

俺としては、特に断る理由がない。というより、女社長のヒモにな

ろつかと言いだしたのは俺自身なのだ。

「年はいくつくらいの人ですか。」

「そうねえ。ちょうど私と、同じくらいかしら。」

そりやまたずいぶん年上だが、社長ともなると、どうしても年は食っているに違いない。康子くらいの年なら、全然良しとしなくては。俺は非番の日に康子と待ち合わせることにした。

康子と待ち合わせしたのは、おしゃれなイタリア料理屋だった。康子は先に来ていたので、俺はその席に同伴する。紹介してくれるというお相手は、まだ来てないようだ。

「で、女社長というのは、なにか遅れてるんですか。」

「ふふ。驚くわよ。それは、私。」

「ええつ。康子さんって、普通のOLじゃなかったんですか。」

「今はね。ねえ、こないだ、私の兄が住職を継ぐのを嫌がっているって話、したじゃないの。」

「ええ。」

「そうするとどうなるかというのと、妹の私が、誰かと再婚すれば、その夫が住職になれるというわけよ。」

「はあはあ。」

「うちのお寺って檀家も多いし、田舎だけどころ裕福なのよ。」

「はあ。」

「私の母も、早く田舎に戻りたいって言ってるし。子供も田舎でのびのび育てたいし。」

俺はだんだん彼女の言いたいことが読めてきた。康子は俺と結婚して、俺に寺の坊主になれと言っているわけだ。うーむ。

「お寺の和尚さんというのはようするに一国一城の主よ。社長さんなのよ。その上簡単に倒産はしないし。宗教法人だし。不況にも強いし。霊園とか開発し放題だし。近くに国道や高速道路も通って、これからニュータウンやショッピングモールもできるわよ。鉄板で安泰なのよ。」

うーむ。どこまでほんとうの話か知らないが、かなりおいしい話ではあるようだ。

「生活は安定してるわよう。自由な時間もたくさんあるし。なんなら月一くらいなら、東京にも出て来れるわよ。あたしもたまには都会で遊びたいしさ。」

俺が逡巡していると、康子はじれったそうに付け加えた。

「あなた、私がコブ付きのおばさんだから嫌がつているのね。いいわよ別に。あなたが二号さんくらい困っても。私は別に平気よ。」
うわあ。でたあ。またしても二号さんかよ。俺は、田舎の住職となつて、康子の実家で彼女の家族と暮らしつつ、たまに東京に出てきて、秋子とも付き合っている、そんな自分を想像してみた。

俺はおそろおそろ質問してみた。

「なかなか、けっこうな話だとは思いますが、」

俺は生牡蠣をシャブリで流し込みながら、続けた。

「お坊さんつてのは俺でもなれるもんですか。」

「あなた、自動車の免許くらい、もってるわよね。」

「もってますよ。」

「じゃあ、大丈夫。田舎の檀家回りには車が必要だからね。後はお経を覚える暗記力くらいはあつた方が良いかしら。まあ、だいたい住職なんてものは、寺の息子なら誰でもなれるんだけど、普通は仏教系の大学を出るものよ。あなた、大学を三年まで行って中退したんでしょう。ならこれから仏教系の大学に三年次編入しなさい。それで二年間、みっちり仏教の専門課程を学んで、それで晴れて住職になれば良いでしょう。」

もし、あなたがその気なら、いますぐ、父に連絡するわ。父も喜ぶわよう。」

俺は、生牡蠣というものが、こんなにのどにつかえて飲み込みにくいものとは知らなかった。その上なぜか俺は悦子の顔を思い浮かべていた。あの、垂れ目で下ぶくれな顔を。別れるはずの女の顔を。

「良い話のようだけど、しばらく考えさせてくれる。」

「良いわよ。良く考えてね。」

その日俺は朝五時まで康子さんといろんなバーなどをはしごした。悦子の家に戻ったときにはへとへとに疲れていた。

俺は、頭の中では、この話は断固受けるべきだと思っていた。何しろ、婿養子で住職になるなんて、この上なく完璧な幸運に違いないのだから。

康子にしても、年齢は仕方ないものがあるとして、容姿はまずまずであって、愛人までもって良いというのだから、いたれりつくせりだ。

*

俺は、一応康子を自分の妻とするのであれば、しばらくはつきあってみて、相性が良いかどうかくらいは確かめておかねばなるまいと思った。一生連れ添う可能性もあるのであるから、相性は悪いより良いに決まっている。その判断を、半年か一年するのは、なんとなく俺には急ぎすぎな気がするのだ。

「康子さん。あのう、俺と康子さんの関係は、店の人たちにはだまつておいてくれるかな。そういう、店の決まりなんで。」

「いいわよう。」

「返事はいつまでにすれば良いですか。」

「ゆっくり考えてください。でもね、もしこの話を受けるつもりなら、そろそろ編入学入試の出願時期だから、さっそく仏教系大学に出願してもらわよう。」

ふむ。単に出願したり入試を受けるくらいならやっておいてもよからう。実際に入学するのは、来年四月なわけだし。

俺は早速ネットで募集案内などを確認したところ、仏教系の大学は首都圏にもあるが、関西、特に京都に多いことがわかる。かつ、関東の大学で康子の家の宗派で絞り込めば、それほど選択肢は多くない。さらにその該当する学科の編入学試験の出願期間は来月の一週

間ほどしかないことがわかった。入試科目は小論文と英語と面接。俺は大慌てで願書を取り寄せた。ずっと理系だった俺は、小論文などというものの勉強をしたことがない。過去問など取り寄せて勉強してみる。

それでまあ、「住職のなり方」「住職の資格」などいろいろとググってみると、やはり、縁もゆかりもない人間の場合、寺の娘のところへ養子に行くなりし、かつ檀家を説得するなりしなるとなれないものであるらしい。なろうと思ってなれるものじゃあない、大学で資格を取ったけれど、なりたくてもなれないやつが大勢ひかえている、羨望の職業なのだ。

俺は昔、DVDで借りて見た、『居酒屋兆治』という映画を思い出していた。高倉健と大原麗子が主演。戦後まもなくの頃、主人公とヒロインの家はどちらも貧乏で、貧乏人どうし結婚しては食っていけないからと、二人はそれぞれ金持ちと結婚する。しかしヒロインの大原麗子は、いつまでも高倉健を忘れられず、家出し、無言電話をかけまくり、キャバレーで働きながらパチンコ屋の二階の下宿に住み、酒に溺れ、サントリーオールドをラッパ飲みして、食道静脈瘤破裂という壮絶な死に方をする。

俺は、その映画を見たとき、いくら戦後まもなくの貧困時代といえ、愛し合っているものどうしが、飯が食えないからと結婚をあきらめるはずがないと思った。そこに作り話っぽいものを感じた。

尾崎紅葉の『金色夜叉』にしたってそうだ。時代背景も違うが、好きあつてるなら駆け落ちでもして生きていけばよいのではないかと思っただ。

しかし今俺が悦子を捨てて康子と結婚し、貧乏だからヒモになろうというのは、つまるところ、『居酒屋兆治』や『金色夜叉』と同じ話なのだ。

俺と悦子は、駆け落ちしてまで一緒になろうというほど、思い詰めて、熱烈に恋愛したのではない。またそれほど貧乏というものを恐れているわけでもない。そりゃあそうだろう。今の世の中、ほんと

に食えないほど困ってるやつは滅多にいないし、仮に居たら生活保護でももらって暮らしていくに違いない。だが、悦子のせいにするようでなんだが、俺がバイトか派遣か契約社員で、手取りの給料といてもわずかなものであり、また悦子の収入にしてもたかが知れていて、いつまでたっても共働きで子供も作れず家も買えない、そんな暮らしを悦子が望んでいるだろうか。俺一人であればなんとでもなるが、悦子のことを思えば、俺は身を引いて、彼女がもっと良い男と結婚できるようにしてやるべきなのではないか。俺は俺で、甲斐性のない夫として、妻に迷惑をかけるよりは、いつそのこと、俺を専業主夫として必要としてくれる、生活力のある女を妻にした、そんな気持ちもあるのだ。

また康子という女にしてもかわいそうなやつだ。もとの夫がどういうやつかは知らぬが、これから父親のいない子供をずっと一人で育てていかねばならぬ。俺が康子の夫になれば、八方うまく収まるではないか。

俺は康子に報告した。来月、十月の出願期間に出願して、十一月の編入学試験を受ける、と。

康子は喜んだ。

「じゃあ、父に、再婚相手と寺の跡継ぎが見つかったって、報告しても良い。」

「ちよつと待ってくれ。十二月に試験結果が出て、入学金を払い込むのはその先だよな。」

「入学金や授業料なら、当然私が払いますよ。あなたの保護者として。」

「もちろん、入学金や授業料は、援助してもらいたいんだけど、その、入学金を振り込むときまで、あなたのお父さんに相談するのは、待ってもらえないかな。俺自身、こんなに早く入試を受けなくちゃいけないとは思ってなかったから、まだ心の準備ができてないんだ。自分の親にもまだ何も話してないし。入試を一年延ばすのはもった

いないから、すぐに受けるけども、僕がそのう、君のところの養子になるという話を、君の親にするのは、もう少し待っていてほしいんだ。」

「ふうん。まあ、いいわ。私だって、あなたを嫌々夫にしたって、さきざき苦勞するだけですからね。」

こんな具合に話はいつの間にか着々と進んでいくのだった。

俺は、店番の暇なときなどに、つらつらと考えるのだ、この仏教系学科の編入学試験というものが、若干名ではあるがもうけられているというのは、大学生時代に俺のように寺の娘と縁があつて、急に結婚が決まつて、住職になろうか、なつてもらおうかという話になつて、それじゃあ住職の資格をとらにゃあならんなという話になつて、進路を変更して仏教学科に入るんだろうなあ。

俺は初めて康子の息子の重之と面会して、三人で食事した。重之は、まだ小学二年生。手のかかるさかりであろう。俺のことをものすくい目つきでにらんでいるが、まだ幼いのだから、仕方のないことだ。この子に嫌われるつもりはない。この子供を見ていると、結婚するってことが、いきなりリアルに、自分のこととして実感できたよ。

重之が成人するまであと十五年か二十年。それから、彼が寺を継げば、俺は不要になる。その頃、俺はまだ四十になつたかならぬか。

アラフォーだ。そして、もしかすると、俺は中年過ぎに康子に捨てられる運命かもしれん。まあそれも仕方ない、すべては俺のすけべ心のせいなのだから。康子が言うように、俺もせいぜいよそに愛人でも探しておこう。ただし、康子が俺の子を産むなどということがあれば、話はまた違つてくるかもしれんな。

しかし、俺の親は、俺が連れ子のいる女と結婚して、寺の住職になるなんて聞いたたら、なんて言うだろうか。別に反対はしないだろうけど。あきれるかな。

俺は悦子にも秋子にも内緒で、受験の準備を進めた。

某大学の某キャンパスで、編入学試験を受けた。午前中に小論文と

英語の筆記試験があつて、午後に面接があつた。小論文の課題は「次の文章は岡倉天心『茶の本』の一部である。この文章を参考にし、て、仏教が日本のアートに与えた影響について八百字以内で述べよ」というものであつた。俺は岡倉天心も茶も仏教アートも何も知らぬ。仕方がないので、素人なりに適当に考えて書いた。

英語はこれまた英文を読まされて、それについて和訳したり、文章の意味を問う問題。

最後に面接。受験者は三十人くらいは居ただろうか。俺は出願時期が遅かつたせいか、受験番号が最後の方であり、だいぶ面接まで待たされた。

志望動機を聞かれた。俺は、ずばり答えた。寺の娘と結婚して住職になることになったからです、と。

面接の教員たちは、「それはおめでとう。がんばりたまえ。」と俺を励ましてくれた。

俺はわざわざ発表日に自分の目で確認するため、某大学某キャンパスに足を運んだ。無事合格していた。

悦子の住む家に帰ろうとしたが、どうしても帰れない。足が向かないのだ。

俺は、康子に電話した。

「合格したよ。入学金を振り込んでもらうように、君のお父さんに相談してくれないか。」

康子は答えた。

「おめでとう。すぐに父に連絡するわ。ありがとう。決心してくれて。」

俺は、十二月の寒空の下、どこへも行くことができず、二、三人の客のために朝まで仕事して、悦子がかけた頃合いに家に戻って寝た。

翌朝、といつても午後近くだが、俺は自分の携帯がぶるぶる鳴っているのに起こされた。康子からだつた。

さていよいよ俺は康子の夫になるのだな。そのだんごりの相談だろうと思っただけど、

「襄君。良く聞いてね。実は、昨日電話して初めて知っただけど、私の兄が、父からお寺の権利関係をすべて譲り受けたあと、檀家の人たちと相談して、宗教法人を、全然赤の他人に譲渡してしまったの。つまり、お寺を売却してしまったのね。」

「えっ。つまり、それってどういうこと。ていうか、お寺って売ったり買ったりできるの。」

「休眠している宗教団体や、檀家は居るけど住職が不在なお寺なんかは、宗教法人を売買することがあるのよ。兄ときたら、私に何の相談もなしに、勝手に売り払ってしまったわ。いくらもうかつたのかしら。父も父よ。私がそのうち再婚するから、私に相続させて、あんなに頼んだのに。」

康子は電話の向こうで泣いているようだった。

「襄さん、あなたが、もう少し早く決断してくれていたなら、こんなことにはならなかったのに。もう、私たちは終わりね。あなたは私とはもう、結婚してくれないでしょう。」

息子が、重之が、あれでけっこうあなたを気に入っていたのに。」

「俺は……。」

康子にんたと言ってやれば良いか、俺にはわからなかった。俺のせいなのだろうか。俺は、みすみす大きな幸運を逃したのだろうか。しかし、俺の心は、なんとも言えない開放感に浸っていた。やっぱり俺は、康子とは結婚したくなかったんだ。やっと自分のほんとうの気持ちに気づいた。

俺は、すぐに秋子に電話した。

「すみませんが、俺、店を辞めさせてください。それから、俺に会いに来るやつがいたら、急にいなくなっでどこにいるかもしらないっで、言ってもらえますか。」

「あらあ。お客さんとのトラブル？女性客でしょう（笑）。

あはは、襄、あんたドジ踏んだわね。」

わかったわよ。じゃあまたね。私には、連絡とってくれるんでしよ
う。」

「ええ。そのうちきつと連絡します。」
それから俺は、そそくさと携帯ショップに行き、番号を変更した。
なんか、卑怯な気はするが、康子とはもう二度と会わないのが良い
に違いない。このまま、ずるずると変な関係が続いたら、お互い傷
口を広げるだけだ。

俺は、携帯ショップから悦子の部屋に戻ると、悦子が帰って来るの
を、洗濯物を片付けたり皿を洗ったりしながら、ぼんやりと待って
いた。俺はすっかり悦子とは別れるつもりでいたから、今日辺り、
その話を切り出すはずだった。しかし、康子との話がおじゃんにな
ってしまったから、素知らぬ顔で、今までどおり、悦子と暮らし続
けることも不可能ではない。悦子は、俺が同居する限り、当分の間、
ここから神田まで通うつもりだなどと、けなげなことを言っていた。
悦子の口ぶりはいつも、俺がどうなるうとも、俺と彼女の関係だけ
は、永遠に続くような、そんな前提の上にあるように思える。
しかし、俺はこれからどうすれば良いのか。バイトも辞めてしまい、
気も抜けてしまって、何も手がつかない状態だ。

悦子はまた遅くなるかと思ってたら、夕方くらいにばんばんにふく
らんだレジ袋を持って帰ってきた。悦子も俺がこんな時間に家に居
るのが珍しいらしく、「あら、居たの。大したものは作れないわよ。
」と言いながら、キッチンのほうで何やら炊事を始めた。

俺は悦子の後ろに立って、「もうすぐクリスマスだねえ。」などと
何気なく季節がらの話などすると、悦子はようやく俺のようすが普
段と違うのに気づいたらしく、「どうしたの。あなたらしくもない。
」などと怖い目で俺を見た。「そろそろこたつでも出そうか。」そ
う言っておれはリビングのほうへ戻った。もう俺は、何もかも悦子
に話す気でした。悦子と別れるにしろこのまましばらくつきあうに
しろ、こうなった以上全部打ち明けるべきだと。

俺と悦子は久しぶりにそろって家で晩飯を食った。

悦子はテレビのチャンネルを忙しく変えながら飯を食うやつだ。俺は滅多にテレビを見ないし、チャンネルを変えることもない。悦子が見る番組を、俺もながめているだけだ。

俺が康子との話を始めると、悦子はテレビの電源を切った。俺はそのまま、あらいざらい話した、俺が康子という寺の娘で、バツイチ子持ちと結婚して、住職を継ごうと思って、受験し、合格して、康子に報告し、結局だめだったという話を。

悦子は、無言で立ち上がり、シングルベッドの中に潜りこんで、壁を向いて寝てしまった。

俺が悦子のそむけた顔を、無理にのぞき込むと、涙をぼろぼろぼろこぼしてやがる。

こいつはいつも、少しきついことを言うとすぐへそを曲げてしまう。困ったやつだが、やはり俺の言ったことがそうとうショックだったに違いない。

俺は狭苦しいベッドの中でしばらく悦子を抱いてやるしかなかった。

悦子は極端に無口になった。怒っているのは確かだ。

俺はしかしどこにも行き場がなく、そろそろ田舎に帰ろうかと思いつながら、そのまま悦子の部屋に居続けていた。

正月になって悦子が言った、「今日は、何も言わず、私につきあってくれ。」

へえ、なんだろうと思った。「いいよ。」

俺は悦子と一緒に中央線でお茶の水まで出て、それから秋葉原まで歩き、つくばエクスプレスに乗り換えた。驚いたことに、どうやら悦子は俺を実家に連れて行こうというらしい。

駅には悦子の親が車で迎えに来ていた。俺は「初めまして。」と挨拶した。

悦子の実家というのは、筑波山の麓の田園地帯の中の、農家だった。

母屋には土間まである。兼業農家で、父親は小さな印刷所を営んでいるらしい。親戚一同が集まっていて、俺は悦子に紹介された。その中で、なぜか、工務店をやっているという悦子の従兄いとこが、「悦子をよろしく頼むよ。」と挨拶してきた。俺はいつたいどういう話になっているのだろうと、ずつとびくびくし通しだった。酒も勧められたが、仕方なくちよつと舐める程度にした。泊まっていけと言われたが、俺が帰りたがったので、悦子も一緒に日帰りすることになった。

帰りの電車の中で悦子が言った、「あなたが女のヒモになりたがっていたなんて、こないだ初めて知ったわ。」

「そうかね。」

「私、そろそろあの八王子の部屋は解約して、実家に住もうと思うの。」

「そうか。わかったよ。」

女の方から別れ話をさせて、むごいことをしたものだ、と悦子の顔を眺めた。

「それで、あなたも私の実家に住む？」

「ええっ？」

「あなたを私のヒモにしてあげるわよ。その代わり条件が三つあるわ。」

悦子が何を言い出したのか、ピンと来ないまま、俺はひとまず、彼女の話聞いた。

「ひとつは、私の父の農業の手伝いをする事。ひとつは、私のいとこの工務店で働くこと。もう一つは、そのうち茨城の大学に編入学して、ちゃんと建築士の資格を取る事。どう。そんな悪い条件じゃあないでしょう。」

ふうむ。なるほど。俺は悦子の考えがやっと読めた。

悦子は俺に仕事を見つけてくれたというわけだ。俺が建築学科中退だものだから、いとこの工務店で働けというのだ。そうすると一応俺は、悦子に養われるというのでなく、自分の食う分くらいは自分

で稼げるというわけである。俺はもう、エンジニアなどにはならな
いつもりであったが、工務店で働くとなれば、一級建築士の資格く
らいもっておいた方がよからう。

「しかし、急だな。いつ引越すんだ。」

「ぐずぐずしていても仕方ないでしょう。すぐ不動産屋に行って、
引越し屋さん呼んで、動ければすぐにでも動くわ。そして私も、
あなたのご両親にご挨拶に行かなきゃ。」

「おまえがそんなにだんだん早いやつだとは思わなかったよ。」
俺は苦笑した。

「あなたがちよつとぐずで、無計画なだけでしょ。」
なんだかんだがあつたが結局俺は悦子の尻に敷かれるだけなのか、
そう思うとなんだかばかばかしい気持ちがある。

俺が悦子と一緒に茨城に越してくると、何しろ震災の復興のために、
工務店は大忙しで、俺は朝から晩まで働かされた。悦子はつくばエ
クスプレスで神田の会社まで通い始めた。お互い、口をきくひまも
ないほど忙しい。しかしまあ、このご時世、忙しいほど仕事がある
つてのはありがたいことだ。忙しければ忙しいほど、悦子のいとこ
と一緒に働き、悦子の親と同居する気まずさも、いくぶん紛れると
いうものだ。もう一つ、ありがたいのは、朝食でいつも納豆が食え
ることだ。さすがに茨城は納豆の本場である。

終わり

(後書き)

パプーでも公開してます。

<http://p.booklog.jp/book/24099>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4828s/>

超ヒモ理論

2011年4月16日11時29分発行